

ナイチンゲール

ハンス・クリスチャン・アンデルセン Hans Christian Andersen

矢崎源九郎訳

青空文庫

中国という国では、みなさんもごぞんじのことと思いますが、皇帝こうていは中国人です。それから、おそばにつかえている人たちも、みんな中国人です。さて、これからするお話は、もう今からずっとむかしにあったことですから、それだけに、かえって今お話しておくほうがいいと思うのです。なぜって、そうでもしておかなければ、忘れられてしまいますからね。

皇帝の住んでいる御殿ごてんは、世界でいちばんりっぱな御殿でした。なにもかもが、りっぱな瀬戸物せともので作られていました。それには、ずいぶんお金がかかっていました。ただ、とてもこわれやすいので、うっかり、さわりでもすれば、たいへんです。ですから、みんなは、よく気をつけなければなりません。

お庭には、世にもめずらしい花が咲さきみだれていました。なかでも、いちばん美しい花には、銀の鈴すずがゆわえつけてありました。その鈴は、たいそうよい音をたてて、リンリンと鳴りましたので、そのそばを通るときには、だれでも、つい、花のほうに気をとられるほどでした。

ほんとうに、皇帝のお庭にあるものは、なにもかもが、さまざまの工夫くふうをこらしてあり

ました。おまけに、そのお庭の広いことといったら、おどろいてしまいます。お庭の手入れをする植木屋でさえも、いったい、どこがお庭のおわりなのか、見当もつかないくらいだったのです。そのお庭をどんどん歩いて行くと、このうえもなく美しい森に出ました。そこには、高い木々がしげつていて、深い湖がいくつもありません。森は、青々とした深い湖の岸までつづいていて、木々の枝は水の上までひろがっていました。大きな船でも、帆ほをはったまま、その下を通ることができました。

さて、その枝に、一羽いちわのナイチンゲールが住んでいました。その歌声は、ほんとうにすばらしいものでした。ですから、仕事にいそがしい、貧ますしい漁師でさえも、夜、網あみをうちにて、ナイチンゲールの歌声を耳にすると、思わず仕事の手をやすめてはじつと聞きつけたものでした。

「ああ、なんとというきれいな声だ！」と、漁師は言いました。けれども、また仕事にかからねばなりません。それで、鳥のことは、それなり忘れてしまいました。けれども、またつぎの晩、漁にでかけて、ナイチンゲールの歌を聞くと、漁師はまた同じように言うのでした。

「ああ、まったく、なんとというきれいな声だ！」

世界じゆうの国々から、旅行者が皇帝の都にやってきました。みんなは、御殿とお庭を見ると、そのすばらしさに、ただただおどろきました。ところが、ナイチンゲールの歌声を聞くと、

「ああ、これこそ、いちばんだ」と、口々に言いました。

旅行者たちは、自分の国へ帰ると、さつそく、そのことを人に話しました。学者たちは、皇帝の都と、御殿と、お庭とについて、幾冊いくさつも幾冊も、本を書きました。もちろん、ナイチンゲールのことを、忘れるようなことはありません。それどころか、ナイチンゲールは、いちばんすぐれたものとされました。詩をつくることのできる人たちは、あの深い湖のほとりの森に住んでいるナイチンゲールについて、それはそれは美しい詩をつくりました。

こういう本は、世界じゆうにひろまりました。ですから、そのうちのいくつかは、しぜんと皇帝の手にもはいました。皇帝は、自分の金の椅子いすに腰こしかけて、何度も何度も、くりかえし読みました。そして、ひっきりなしにうなずきました。それもそのはず、自分の都や、御殿や、お庭のことが、美しく書かれているのを読むのは、うれしいことにちがいませんからね。

「しかし、なんといつても、ナイチンゲールが、いちばんすぐれている」と、そこには書いてありました。

「これは、なんじや？」と、皇帝は言いました。「ナイチンゲールじやと？ そのような鳥は、知らんわい！ そんな鳥が、このわしの国にいるんじやと？ おまけに、わしの庭にいるそうじやが。はて、わしは、まだ聞いたこともないが。本を読んで、はじめて知ったというわけか」

そこで、皇帝は、侍従じじゆうを呼びました。この侍従は、たいそう身分の高い人でしたので、自分より位の低いものが、こわごわ話しかけたり、なにかたずねたりしても、ただ、「プー！」と答えるだけでした。むろん、この返事には、なんの意味もありません。

「わが国に、世にもめずらしい鳥がおるそうじやな。ナイチンゲールとか、申すそうじやが」と、皇帝は言いました。「なんでも、わが大帝国の中で、いちばんすぐれたものだということじや。なぜ今まで、わしに、そのことを、ひとことも申さなかったのか」

「わたくしは、今までに、そのようなものごとを、聞いたことがございません」と、侍従は申しました。「今日こんにちまで、そのようなものが、宮中に、まかりでたことはございません」

「今夜にも、さつそく、そのものを連れてまいって、わしの前でうたわせてみよ」と、皇帝は言いました。「世界じゅうのものが、知っておるといふのに、わしだけが、自分のもっているものを知らんとは、あきれかえった話じゃ」

「わたくしは、いままでに、そのようなものごとを、聞いたこともございません」と、侍従は言いました。「ですが、かならず、そのものをさがしだし、見つけてまいります」

でも、いったい、どこへいったら、見つかるのでしょうか？ 侍従は、階段という階段を、あがつたり、おりたり、広間をかけぬけたり、廊下ろうかを走りまわったりしました。しかし、だれに出会っても、ナイチンゲールのことを聞いたという人はひとりもいないのです。それで、侍従は、また、皇帝のところへかけもどつて、「おそらくそれは、本を書いた人たちの作り話にちがひございません」と、申しあげました。

「陛下へいかが、書物に書かれておりますことを、すべて、お信じになりませぬよう、お願い申しあげます。なかには、いろいろの作りごともございますし、また、妖術ようじゆつなどといわれておりますようなものもございますので」

「だが、わしが読んだという本は」と、皇帝は言いました。「りっぱな、日本の天皇てんのうより、送られてきたものじゃ。それゆえ、うそいつわりの、書いてあろうはずがない。わし

は、ぜがひでも、ナイチンゲールのうたうのを聞きたい。どうあつても、今夜、ナイチンゲールをここへ連れてまいれ。なにをおいても、いちばんかわいいがつてやるぞ。しかし、もしも連れてまいらぬときは、よいか、宮中の役人どもは、夕食のあとで、ひとりのこらず、腹をぶつことにいたすぞ」

「チン、ペー！」

と、侍従は言つて、またまた、階段をあがつたり、おりたり、広間をかけぬけたり、廊下を走りまわつたりしました。すると、宮中のお役人の半分もの人たちが、いつしよになつてかけずりまわりました。だれだつて、おなかをぶたれるのはいやですからね。こうして、世界じゅうの人々が知つているのに、宮中の人たちだけが知らない、ふしぎなナイチンゲールの捜索そうさくがはじまつたのです。

とうとうしまいに、みんなは、台所で働いている、貧しい小娘こむすめに出会いました。ところが、娘はこう言いました。

「ああ、ナイチンゲールのごとでございますか。それなら、あたし、よく知っておりますわ。はい、ほんとに、じょうずにうたいます。

毎晩、あたしはおゆるしをいただきますして、かわいそうな、病気の母のところへ、お食

事ののこりものを、すこしばかり持つてまいりますの。母は、浜べに住んでいるのでございます。あたしが、御殿へもどつてまいりますとき、つかれて、森の中で休んでおりますと、ナイチンゲールの歌声が、聞えてくるのでございます。それを聞いておりますと、思わず、なみだうか涙が浮んでまいります。まるで、母が、あたしにキスをしてくれるような気がいたしますの」

「これ、これ、娘」と、侍従が言いました。「わたしたちを、そのナイチンゲールのところへ、連れていってくれ。そのかわり、わしは、おまえを、お台所の役人にしてやろう。そのうえ、皇帝さまが、お食事をめしあがるところも、見られるようにしてやろう。というのは、皇帝さまが、今夜ナイチンゲールを連れてくるようにと、おっしゃっておいでなでな」

それから、みんなで、ナイチンゲールがいつも歌をうたっているという、森へでかけました。宮中のお役人も、半分ほどの人たちが、そろそろとついていきました。こうして、みんなが、いさんで歩いて行くと、一ぴきのめウシが鳴きはじめました。

「ああ、あれだ！」と、こしやう小姓たちが言いました。「やっと、見つけたぞ。だが、あんなちつぽけな動物なのに、ずいぶん力強い声を出すんだなあ。だけど、あれなら、前にも、

たしかに聞いたことがあるぞ」

「いいえ、あの声は、めウシでございます」と、お台所の小娘が言いました。「その場所までは、まだまだ、かなりございます」

今度は、沼ぬまの中でカエルが鳴きました。

「なるほど、すばらしい！ おお、聞える、聞える。まるで、お寺の小さな鐘かねが、鳴っているようだの」と、宮中づきの中国人の坊ぼうさんが言いました。

「いいえ、いいえ、あれは、カエルでございます」と、お台所の小娘は言いました。「ですが、もうじき、聞えると思います」

やがて、ナイチンゲールが鳴きはじめました。

「あれでございます」と、小娘が言いました。「お聞きください！ お聞きください！ そら、そら、あそこにありますわ」

こう言いながら、娘は、上のほうの枝にとまっている、小さな灰色の鳥を指さしました。「これは、おどろいたな」と、侍従が言いました。「あんなものとは、思いもよらなかつた。ふつうのつまらん鳥と、すこしもかわらんではないか。さては、こんなに大ぜい、えらい人たちがきたものだから、鳥のやつ、色をうしなってしまうんだな」

「かわいいナイチンゲールさん！」と、お台所の小娘は、大きな声で呼びかけました。

「あたしたちの、おめぐみぶかい皇帝さまが、あなたに歌をうたってもらいたい、とおっしゃってるのよ」

「このうえもない、しあわせでございます」

ナイチンゲールは、こう言つて、なんともいえない、きれいな声でうたいました。

「まるで、ガラスの鈴が鳴るようではないか！」と、侍従が言いました。「あの小さなのどを見なさい。なんとまあ、よく動くではないか。わたしたちが、今まで、これを聞いたことがないというのは、まったくふしぎなくらいだ。しかし、これなら、宮中でも、きつとうまくやるだろう」

「もう一度、皇帝さまに、うたつてさしあげましょうか？」

ナイチンゲールは、皇帝もそこにいるものと思つてこう言いました。

「これは、これは、すばらしいナイチンゲールどの！」と、侍従は言いました。「今夜、あなたを、宮中の宴えんかい会におまねきするのは、わしにとつて大きなよろこびです。宮中へまいりましたら、あなたの美しい声で、どうか、皇帝陛下のみ心を、おなぐさめ申しあげてください」

「わたくしの歌は、このみどりの森の中で聞いていただくのが、いちばんよいのでございます」と、ナイチンゲールは言いました。けれども、皇帝がお望みになっていると聞いたので、よろこんで、いっしょについていきました。

御殿の中は、きらびやかにかざりつけられました。瀬戸物でできているかべや床ゆかは、幾千もの金のランプきんの光で、キラキラとかがやきました。ほんとうに、鈴のような音をたてて鳴る、このうえもなく美しい花々が、いくつもいくつも廊下におかれました。そこを、人々が走りまわったり、風が吹きふこんできたりすると、どの花も、いつせいにリンリンと鳴りましたので、人の話も聞えないくらいでした。

皇帝のいる、大きな広間のまんなかに、金のとまり木がおかれました。そこに、ナイチンゲールがとまることになっていたので。この広間に、宮中のお役人が、ひとりのこらず集まりました。お台所の小娘も、とびらのうしろに立っていてよいという、おゆるしをいただきました。なにしろ、いまでは、この小娘も、「宮中お料理人」という、名前をいただいているのですからね。だれもかれもが、いちばんりっぱな服を着ていました。みんなは、小さな灰色の鳥のほうを、じっと見ていました。そのとき、皇帝が、鳥にむかってうなずいてみせました。

すると、ナイチンゲールが、それはそれは美しい声でうたいはじめました。みるみるうちに、皇帝の目には涙が浮んできて、やがて、頬ほおをつたわって流れおちました。すると、ナイチンゲールは、ますますきれいな声でうたいました。それは、人の心の奥おく底そこまで、しみとおるほどでした。皇帝は、心からよろこんで、自分の金のスリッパを、ナイチンゲールの首にかけてやるように、と言いました。ところが、ナイチンゲールは、お礼を申しあげて、ごほうびは、もうじゅうぶんいただきました、と申しました。

「わたくしは、皇帝陛下へいかのお目に、涙が浮びましたのを、お見うけいたしました。それこそ、わたくしにとりましては、なににもまさる、宝でございます。皇帝陛下の涙には、ふしぎな力があるのでございます。ほんとうに、ごほうびは、それでじゅうぶんでございます」

そう言うと、またまた、人の心をうつとりさせる、美しい、あまい声で、うたいました。「まあ、なんて、かわいらしいおせじを言うのでしょうか！」と、まわりにいた貴婦人たちが言いました。それからというもの、この婦人たちは、だれかに話しかけられると、口の中に水をふくんで、のどをコロコロ言わせました。こうして、自分たちも、ナイチンゲールになつたような気でした。

いや、侍従や侍女たちまでも、満足まんぞくしているようすをあらわしました。だけど、このことは、たいへんなことなのですよ。なぜって、この人たちを満足させるなどということは、とてもとてもむずかしいことだったのですから。こういうわけで、ナイチンゲールは、ほんとうに、大成功をおさめました。

ナイチンゲールは、宮中にとどまることになりました。自分の鳥かごも、いただきませんでした。そして、昼には二度、夜には一度、毎日、散歩にでかけるおゆるしもいただきました。でも、散歩に行くときにも、十二人の召めしつかい使つかいがおともについていくのです。おまけに、召使たちは絹のリボンをナイチンゲールの足にゆわえつけて、それをしっかりと持つているのです。こんなふうでは、散歩にでかけたところで、ちっとも楽しいはずがありません。町じゅうの人たちは、よるとさわると、このふしぎな鳥のうわさをしあいました。ふたりの人が、道で出会うと、きまって、そのひとりが、「ナイチン——」と言いました。すると、もうひとりには、そのあとをうけて、「ゲール」と答えました。そして、ふたりは、ほつとため息をついたのでした。これで、ふたりには、おたがいの気持が、よくわかったのです。また、そればかりではありません。食料品屋の子供などは、十一人までもが、ナイチンゲールという名前をつけてもらいました。もつとも、名前ばかりはいくらよくつても、

声のいい子はひとりもいませんでしたかね。

ある日のこと、大きなつつみが、皇帝こうていの手もとへ届きました。見ると、つつみの上には、「ナイチンゲール」と書いてあります。

「また、この有名な鳥のことを書いた、新しい本がきたようじゃな」と、皇帝は言いました。

けれども、それは本ではありませんでした。箱はこの中にはいつていたのは、小さな置物です。見れば、ほんとうによくできていて、生きているほんものにそっくりの、ナイチンゲールでした。そのうえ、からだじゅうに、ダイヤモンドや、ルビーや、サファイヤがちりばめてありました。このつくりものの鳥は、ねじをまけば、ほんものの鳥がうたう歌の一つをうたいました。そして、歌をうたいながら、尾おを上下にふりうごかすので、そのたびに、金や、銀が、ピカピカ光りました。首のまわりに、小さなリボンがさがっていて、それには、

「日本のナイチンゲールの皇帝は、中国のナイチンゲールの皇帝にくらべると、見おとりがします」と、書いてありました。

「これはすばらしい！」と、みんながみんな、申しました。そして、このつくりものの鳥

を持つてきた男は、さつそく、「宮中ナイチンゲール持参人」という名前をいただきまし
た。

「では、二羽にわの鳥をいっしょにうたわせてみよう。そうすれば、きつと、すばらしい二重
唱になるだろう」

こうして、二羽の鳥が、いっしょにうたうことになりました。ところが、さつぱり、う
まくいきません。ほんもののナイチンゲールは、自分かつてにうたいますし、いっぼう、
つくりものの鳥は、ワルツしかうたわないのですから。

「この鳥には、なんの罪もございません」と、楽長が申しました。「ことに、拍子ひょうしも正
しゅうございますし、わたくしの流儀りゅうぎにも、ぴったりあっております」

そこで、つくりものの鳥が、ひとりでうたうことになりました。——つくりものの鳥は、
ほんもののナイチンゲールと同じように、みごとに成功しました。いや、見たところでは、
かえって、ほんものよりもずっと美しく見えました。まるで、腕輪うでわか、ブローチのように、
キラキラかがやいたからです。

つくりものの鳥は、同じ一つの歌を、三十三回もうたわされました。しかし、それでも、
つかれるということはありませんでした。人々は、またはじめから聞きたいと申しました

が、皇帝は、今度は、生きているナイチンゲールにも、なにかうたわせよう、と言いました。——ところが、あの鳥は、どこにいるのでしょうか？　すがたが見えないではありませんか。いつのまにか、あいている窓から飛びだして、みどりの森へ帰って行ってしまったのです。けれども、それには、だれも気がつかなかったのです。

「いやはや、なんたることじゃ！」と、皇帝は言いました。

宮中の人たちは、口々に、ナイチンゲールのことをわるくいつて、「なんとという、恩しらずの鳥だ」と言いました。「だが、わたしたちのところには、いちばんいい鳥がいる」と、人々は言いました。

こうして、つくりものの鳥は、またまた、うたわされることになりました。これで、もう、三十四回目です。うたう歌は、いつも同じなのですが、まだだれも、その歌をすつかりおぼえることができませんでした。そんなにも、むずかしい歌だったのです。そんなわけで、楽長はこの鳥をほめちぎりました。「たしかに、この鳥はほんもののナイチンゲールよりもすぐれています。たとえば、着ているものにしても、たくさんの美しいダイヤモンドにしても、そればかりか、からだの中にしても、まちがいなくすぐれています」と。「と申しますのは、陛下^{へいか}、および、皆々^{みなみな}さま。ほんもののナイチンゲールの場合には、

どんな歌が飛びだしてまいりますやら、わたくしどもには、見当もつきません。ところが、つくりものの鳥の場合には、なんでも、きちんときまつております。しかも、いつも、きまつたとおりであつて、それとちがつたようになることは、けつしてございません。

わたくしどもは、それを説明することができるのでございます。中を開きまして、人間がどのような工夫くふうをこらしたかを、だれにでも見せることができるのでございます。たとえば、ワルツはどんなふうにはいつているか、そして、どんなふうに動くか、そしてまた、どの曲のあとに、どの曲がつづいてくるか、ということなども、明らかにすることができるのでございます」

「わたくしも、そう思います」と、みんなは、口々に言いました。楽長は、つぎの日曜日、この鳥を国民に見せてもよい、というおゆるしをいただきました。

「では、歌も聞かせてやるがよい」と、皇帝は言いました。

人々は、その歌を聞くと、まるで、お茶に酔よつたように、とても楽しくなりました。この、お茶に酔うというのは、まったく中国式なのです。みんなは、「オー！」と言って、「つまみぐい」と呼んでいる人さし指を空にむけてうなずきました。けれども、ほんもののナイチンゲールのうたうのを聞いたことのある、あの貧ますしい漁師たちだけは、こう言い

ました。

「たしかにいい声だし、姿もよく似ている。だが、なんとなく、ものたりないな。それがなんだかは、わからないが」

ほんもののナイチンゲールは、とうとう、この国から追い出されてしまいました。

つくりものの鳥は、皇帝の寢床ねとこのすぐそばに、絹のふとんをいただいて、その上にいることになりました。あっちこつちから送られてきた、金だの、宝石だのが、そのまわりに置かれました。つくりものの鳥は、「皇帝のご寝室しんしつづき歌手」という、名前をいただき、位は左側第一位にのぼりました。皇帝は、心臓のある左側のほうが、右側よりもすぐれていると、思っていたからです。やっぱり、皇帝でも、心臓は左側にありますからね。

楽長は、つくりものの鳥について、二十五冊も本を書きました。その本はたいへん学問的で、たいそう長く、おまけに、とんでもなくむずかしい中国の言葉で書いてありました。けれども、みんなはそれを読んで、よくわかった、と言いました。なぜって、そう言わなければ、ばかものあつかいされて、おなかをぶたれてしまいますからね。

こうして、まる一年たちました。いまでは、皇帝も、宮中の人たちも、そのほかの中国人たちも、みんな、このつくりものの鳥のうたう歌なら、どんな小さな節ふしでも、すっかり

そらでおぼえてしまいました。それだからこそ、みんなはこの鳥を、いちばんすばらしいものに思いました。みんなは、いつしよに、うたうこともできるようになりました。そして、じつさい、いつしよにうたいました。通りの子供たちまで、「チ、チ、チ！ クルツク、クルツク、クルツク！」と、うたいました。皇帝も、いつしよになって、うたいました。——ほんとうに、またとない、楽しいことでした。

ところが、ある晩のことです。つくりものの鳥が、いつものようにじょうずに歌をうたい、皇帝が寢床の中にはいつて、それを聞いていますと、きゆうに、鳥のからだの中で、「プスツ」という音がしました。そして、なにかが、はねとびました。と、たちまち、歯車という歯車が、「ブルルル！」と、からまわりをして、音楽が、はたとやんでしまったではありませんか。

皇帝は、すぐさま寢床からはねおきて、お医者さまを呼びました。でも、お医者さまに何ができましたよう！　そこで、今度は、時計屋を呼んでこさせました。時計屋は、いろいろとたずねたり、しらべたりしてから、どうにか、もとのようになおしました。ところが、「これは、たいせつにしていただかなくてはこまります。拝見いたしますと、心棒がすっかりすりへっておりますが、と言つて、音楽がうまく鳴るように、新しい心棒を入れかえ

ることはできないのでございますから」ということでした。

さあ、なんとという悲しいことがふつてわいたのでしょうか！ これからは、つくりものの鳥の歌を、一年にたった一度しか聞くことができなくなつたのです。おまけに、それさえも、きびしくいえば、まだまだ多すぎるといふのです。けれども、楽長がむずかしい言葉で、短い演説をして、これは以前と同じようによろしい、と申しました。たしかに、そう言われてみれば、前と同じように、よいものでした。

いつのまにか、五年の年月がたちました。今度は、国じゆうが、ほんとうに大きな悲しみにつつまれました。国民は、だれもが皇帝を心からしたつていましたが、その皇帝が病氣になつて、ひとのうわさでは、もうそんなに長くはなからう、ということなのです。もう、新しい皇帝もえらばれていました。人々は、おもての通りに出て、皇帝のおぐあいはいかがですか、と、侍従しじゆうにたずねました。

「プー！」と、侍従は言つて、頭をふりました。

皇帝は、大きな美しい寢床の中に、つめたく青ぎめて、やすんでいました。宮中の人たちは、もうおなくなりになつたものと思つて、みんな、新しい皇帝にごあいさつするため、かけていってしまいました。おつきの召使めしつかいたちも、さつさと、出ていって、皇帝

のことをおしやべりしていました。女官^{にょかん}たちはといえ、にぎやかなお茶の会を開いていました。まわりの広間や廊下^{ろうか}には、足音がしないように、じゆうたんがしきつめてありました。そのため、あたりは、それはそれはひっそりとして、静まりかえっていました。ところが、皇帝は、まだなくなつたものではありません。からだをこわばらせながら、青ざめた顔をして、まわりに長いビロードのカーテンと、おもたい金のふさのたれさがつてゐる、りっぱな寢床の中に、じつと寝ていました。そのずっと上のところに、窓が一つあいていて、そこから、お月さまの光がさしこんで、皇帝と、つくりものの鳥とを照らしていました。

気の毒な皇帝は、もうほとんど、息をすることもできませんでした。まるで、何かが、胸の上のついているような気がしました。そこで、目をあけてみると、胸の上に死神がつているではありませんか。死神は、頭に皇帝の金のかんむりをかぶつて、片手に皇帝の金のつるぎを持ち、もういつぼうの手に皇帝の美しい旗を持っていました。まわりの、大きなビロードのカーテンのひだからは、あやしげな顔が、幾つ^{いくつ}も幾つも、のぞいていました。なかには、ものすごくみにくい顔もありましたが、なごやかな、やさしい顔も見えませんでした。それらは、皇帝が今までにやってきた、わるい行いと、よい行いだったのです。い

ま、死神が皇帝の胸の上にのりましたので、みんなは、皇帝をながめていたのです。

「これを、おぼえていますか？」と、そうした顔は、つぎつぎにささやきました。「これを、おぼえていますか？」

こうして、あやしげなものたちが、いろいろなことをしやべりだしたので、とうとう、皇帝のひたいから汗あせが流れだしました。

「そんなことは、なにも知らん」と、皇帝は言いました。

「音楽だ！ 音楽だ！ 大きな中国だいをたたけ！」と、大きな声で言いました。「このものどもの言うことが、なにも聞えんようにしてくれ」

けれども、あやしげな顔は、なおも、しやべりつづけました。死神はとみれば、まるで中国人そっくりに、いちいち、みんなの言うことにうなずいているのです。

「音楽だ！ 音楽だ！」と、皇帝はさげびました。「これ、かわいい、やさしい金の鳥よ。どうか、うたってくれ！ うたってくれ！ わしはおまえに、金も、宝石も、やったではないか。わしの手で、おまえの首のまわりに、金のスリッパもかけてやったではないか。さあ、うたってくれ！ うたってくれ！」

それでも、鳥は、やつぱり、だまつたままでした。ねじをまいてくれる人が、だれもい

ないのです。ねじをまかなければ、うたうはずがありません。死神はいかかわらず、大きなからつぼの目で、皇帝をじつと見つめていました。あたりはひっそりとして、気味のわるいほど静まりかえっていました。

と、そのときです。窓のすぐそばから、それはそれは美しい歌が聞えてきました。それは、生きている、あの小さなナイチンゲールでした。たったいま、外の木の枝に飛んできて、うたいはじめたところでした。ナイチンゲールは、皇帝がご病気だと聞いて、それは、歌をうたつて、なぐさめと、希望とをあたえてあげようと、飛んできたのでした。ナイチンゲールがうたうにつれて、あやしいもののおかげは、だんだん、うすくなっていきました。そればかりではありません。皇帝の弱りきつたからだの中を、血がいきおいよく、ぐんぐんめぐりはじめました。死神さえも、きれいな歌声にじつと耳をかたむけて、聞き入りました。そして、しまいには、

「もっとつづける、小さなナイチンゲール！ もっとつづける！」と、言いました。

「ええ、うたいましょう。でもそのかわり、わたしに、そのりっぱな金のつるぎをください。その美しい旗をください。それから、その皇帝のかんむりをください」

死神はナイチンゲールが歌をうたうたびに、宝物を一つずつ、わたししました。ナイチン

ゲールは、どんどうたいつづけました。それは、まっ白なバラの花が咲き、ニワトコの花がよいにおいを放ち、青々とした草が、あとに生きのこった人々の涙でぬれる、静かな墓地の歌でした。それを聞くと、死神は、自分の庭がこいしくなつて、つめたい白い霧のように、ふわふわと、窓から出ていってしまった。

「ありがとうございます！　ありがとうございます！」と、皇帝は言いました。「天使のような、かわいい小鳥よ。わしはおまえを、よく知っているぞ。おまえをこの国から追いだしたのは、このわしじゃ。それなのに、おまえは歌をうたつて、あのわるいやつどもを、わしの寢床から追いだしてくれ、わしの胸から死神を追いはらつてくれた。おまえに、どういうお礼をしたらよいか？」

「ごほうびは、もう、いただきました」と、ナイチンゲールは言いました。「わたくしが、はじめて歌をうたいましたとき、陛下のお目には涙があふれました。あのことを、わたくしはけつして忘れはいたしません。それこそ、うたうものの心をよろこばす、なによりの宝なのでございます。——でも、いまは、もう、お休みくださいませ。そうして、元気に、じょうぶに、おなりくださいませ。では、わたくしが、歌をうたつてお聞かせいたしますよう」

そして、ナイチンゲールはうたいだしました。——皇帝は、すやすやと眠ねむりました。それは、ほんとうにやすらかな、気持のよい眠りでした。

お日さまの光が、窓からさしこんできて、皇帝を照らすころ、皇帝は、すっかり元氣になつて、目をさしました。見れば、おそばのものたちは、まだだれひとり、もどつてきてはおりません。みんながみんな、皇帝はもうおなくなりになつたものと、思いこんでいたのです。でも、ナイチンゲールだけは、ずっとそばにいて、歌をうたいつづけていました。

「おまえは、これからは、いつも、わしのそばにいておくれ」と、皇帝は言いました。

「おまえは、うたいたいときにだけ、うたつてくれればよいのだ。このつくりものの鳥などは、こなごなに、くだいてくれよう」

「そんなことは、なさらないでくださいませ」と、ナイチンゲールは申しました。「あの鳥も、できるだけのことはしてまいつたのでございます。いままでのように、おそばにお置きくださいませ。わたくしは、御殿ごてんに巣すをつくつて、住すむことはできません。でも、わたくしの好きなきに、こさせていただきとうございます。

そうすれば、わたくしは、夕方、窓のそばの、あの枝にとまりまして、陛下がおよろこ

びになりますように、そしてまた、お考えが深くなりますように、歌をうたってお聞かせいたしましょう。わたくしは、しあわせな人たちのことも、苦しんでいる人たちのことも、うたいましょう。また、陛下のまわりにかくされている、わるいことや、よいことについても、うたいましょう。歌をうたう小鳥は、貧しい漁師や、農家の屋根の上をも飛びまわりますし、陛下や、この御殿からはなれた、遠いところにいる人たちのところへも、飛んでいくのでございます。

わたくしは、陛下のかんむりよりも、お心のほうが好きなのでございます。と申しませんが、陛下のかんむりのまわりには、なにか、神々しいもののおりが、ただよってはおりますが。――

わたくしは、またまいりまして、陛下に歌をお聞かせいたします。――ですが、一つだけ、わたくしに、お約束やくそくをしてくださいませ」

「なんでもいたす！」と、皇帝は言つて、自分で皇帝の着物を着て立ちました。それから、金でできている、おもたいつるぎを胸にあてて、ちかいました。

「では、一つだけ、お願いしておきます。陛下に、なにかも申しあげる小鳥がおりますことを、どなたにもおつしやらないでくださいませ。そうしますれば、いつそう、うまく

まいりますでしょう」

こう言って、ナイチンゲールは飛んでいきました。

召使たちが、おなくなりになった皇帝を見に、はいつてきました。——や、や、みんなは、びっくりぎょうてんして、そこに立ちどまってしまいました。すると、皇帝が言いましました。

「おはよう！」

青空文庫情報

底本：「人魚の姫 アンデルセン童話集※」[#ローマ数字1、1-13-21] 新潮文庫、新潮社

1967 (昭和42) 年12月10日発行

1989 (平成1元) 年11月15日34刷改版

2011 (平成23) 年9月5日48刷

入力：チエコ

校正：木下聡

2019年1月29日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

ナイチンゲール

ハンス・クリスチャン・アンデルセン Hans Christian Andersen

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 矢崎源九郎訳

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>